

International Development Center of Japan
IDCJ 国際開発センター

「みんなで中学校をつくろうプロジェクト」 ～現地モニタリング報告～

当センターでは2005年から、カンボジアのNGOのJST（アンコール遺跡の保全と周辺地域の持続的発展のための人材養成支援機構）と連携して、同国シェムリアップ州アンコール遺跡群の周辺地域で植樹活動や環境教育の支援を行っています。本稿では活動の成り立ちや概要に加え、昨年12月に行った現地モニタリングの様子をご紹介します。

活動が始まったきっかけは、2004年から2006年にかけて当センターが日本工営（株）ならびに国際航業（株）とのJVで実施したシェムリアップ市街地の振興計画を作成するためのJICA委託の調査です。調査の結果、遺跡周辺の森林が1960年代と比べて70～90%も減少していることが発覚しました。森林の減少による砂ぼこりの増加などによって衛生・住環境が悪化し、観光イメージにも今後影響を及ぼす可能性が高いことが判明しました。そこでJSTと連携し、自然環境に対する意識の向上や中長期的な人材育成に貢献することを目的とした活動を始めました。

開始当初は村の主要な道路周辺の植樹が中心でしたが、活動は徐々に広がりを見せています。数年前からは、中学生、高校生中心のボランティアグループ（通称青年グループ）による保健・衛生面の改善と森林保護の重要性を訴える「環境ワークショップ」と併せ、同じ日に地域の小学校で植樹を行うようになりました。今年は、JSTが助成金を用いて建設し、昨年10月に開校したばかりの中学校の校舎周辺に植樹をしたり、家畜対策の外柵を設置するなど、中学校の緑化支援を中心に活動しています。

植樹などの緑化支援は一見あまり難しくないと思われがちですが、常に順調に進む訳ではありません。成長していた苗木が道路の拡張工事によって掘り起こされることもあれば、成長する前に洪水の被害を受けることもあります。昨年12月のモニタリング期間中には学校の前庭に約10本の苗木を植樹しましたが、同じ校庭には持ち主不明の牛が気持ちよさそうに日向ぼっこをしていました。牛は生活を営む上で重要な家畜として地元住民に大切にされている一方、木によっては牛の唾液が付着することでその後、順調に成長しなくなったり、牛が苗木を食べてしまうこともあるようです。そのため、活動を通して植樹した場所には極力家畜対策の外柵を設置するようにしています。新設の中学校でも裏庭には柵を既に設置しており、前庭にもこれから設置する予定です。



新設の中学校の校庭を見つめるチア代表

また、JSTのチア・ノル代表は自然環境に対する地域住民の意識を改善する取り組みをより一層強化する必要があることを強調していました。多くの人は近代化と経済発展を急いでおり、環境や自然を軽視しがちとのこと。最近になり少しずつ、自然環境の重要性を理解する人が増えてきているようです。モニタリング期間中に中学校で開催された環境ワークショップでは一人の生徒が「強風で校舎に影響が出れば私達は勉強できなくなります。木は風を吸収し、校舎を守ってくれるので、木を守ることは重要だと思います」と発言し、それを聞いた全生徒が拍手をする場面があり、少しその様子が伺えたような気がしました。

中学校を訪問した翌日、農村地域の生活をチア代表から紹介していただきました。ココナッツや椰子の木の葉で家の屋根を作り、茎で壁を作る。グアバの皮は下痢止めになる。臼で粳を玄米にしてから米を炊くまでの作業に約半日かかる。その他、代表自らがポル・ポト政権時代に体験した自然の仕組みを生かした生活の術も細かく教えていただきました。チア代表は、森林が再生した後の生活を明確にイメージしているのかも知れません。活動を継続することで、「アンコールの森」を再生する取り組みを今後とも支援していきたいと思いました。

（文責：国際開発センター 事務職員 川越 洋介）